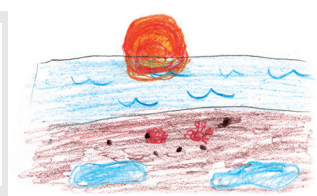


## 漂着ごみは「人工ごみ」

### 「ポイ捨て、絶対にしない」

#### 蔦島でビーチコーミング

# 美しい海いつまでも



# 海のええもん新聞



古里の美しい海を守ろう。子どもたちに海の魅力を再発見してもらう「かがわseaマスター海のエえもん発見隊」が6、7の両日、三豊市仁尾町の父母ヶ浜などで行われました。日本財団が推進する「海と日本プロジェクトinかがわ」の一環。隊員に選ばれた県内の小学5、6年生計20人は、シーカヤックやシュノーケリングの体験、海の生物の観察、浜辺

に打ち上げられたごみの回収などを通じて、海の環境を守る大切さを実感。オリジナルの「海のエえもん新聞」にまとめました。今回は「海の環境」「海の生き物」「海の安全」、27日は「海の楽しみ方」をテーマに作成。新型コロナウイルス対策として、参加者はフェースシールドとマスクを着用し、ソーシャルディスタンス(社会的距離)を意識して臨みました。

## かがわseaマスター

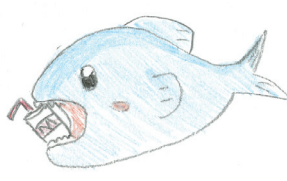
### 三豊で児童20人活動



父母ヶ浜で海浜植物を観察する隊員たち

海のエえもん発見隊の20人は7日、三豊市沖の蔦島の海岸で、漂着ごみの種類や分量を調べ、ビーチコーミングを行いました。カキの養殖に使うプラスチックのパイプやペットボトル、お菓子の袋が目立ちました。隊員の声が多かったのは「どうしてこんな物が海辺にあるんだろう」。カキのパイプは悪天候の影響で流れ出てしまっ

たかもしれませんが、お菓子の袋やペットボトルなどは、人がきちんとごみ箱に捨てていけば海に流れ着くことはないはず。30分程度の活動で大型のごみ袋に10袋以上の人工ごみが集まりました。バスの中で、太平洋の南の島ではアホウドリやウミガメなどがプラスチック製の網に絡まって動けなくなり、細かくな



海岸に落ちているものについて学ぶ隊員たち

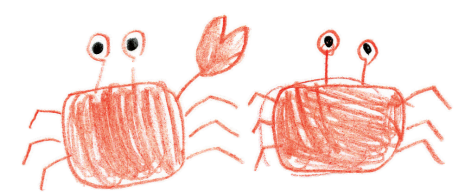
ったプラスチックを誤って食べて消化できずに死んでいる事例について学びました。隊員たちは、海ごみを減らすために自分たちができることをテーマに話し合いました。

## たくましい「命」に感動

「思ったよりも動きが速い」「こんなにたくさんのカニがいるとは知らなかった」。三豊市仁尾町の父母ヶ浜で6日、隊員たちは干潟の生き物を観察しました。猛暑の中でもハクセンシオマネキなどのカニ類やアサリなどの貝類、ハマゴウやおカヒジキなどの海浜植物がたくましく育っていることに感動しました。地元で環境保護活動を行っている「ちちぶの会」のメンバーが案内してくれました。1996年に砂浜を埋め立てて工場を建設する計画に反対した地元有志7人で結成し、現在は80人以上が参加しているそうです。

### 父母ヶ浜で生き物観察

干潮の時間帯は、砂浜に流れ込む江尻川の河口まで砂地が現れます。たくさんある小さな穴には、ハクセンシオマネキがすんでいるそうです。メンバーに手伝ってもらいながらスコップで穴の近くを掘り返すと、数匹が出てくるので、手でつまみ上げるようにしてバケツに入れました。雄のツメは片方が大きくなっているのが特徴で、メスとは一目で区別できます。また海水の届かない乾いた砂浜では、ハマゴウなどがしっかりと根を張っていました。昼ご飯の前には、地元で取れたアジを三枚におろしました。地元のスーパーの鮮魚担当者が包丁の握り方から指導してくれたので、うるこも内臓もきれいに取り除けました。「自分たちでさばいたアジのたぶらの味は最高」とみんな喜んでいました。



ライフジャケットを着けて、堤防から海へ飛び込む隊員たち

## ライフジャケットで安全に 正しく着用海を満喫

隊員たちは6日、家の浦海岸で海遊びの際の安全を確保するためライフジャケットの装着方法を教わりました。模型を使った実験で、立ったまま水の中に入った場合、着用する時のポイント

トは▽体に密着するサイズを選ぶ▽腰や肩のベルトをきつめに締める▽おなかの前のバックルを正確にロックする▽の3点。きちんと装着できていることを確認した上で、水面からの高さ約2メートルの堤防から海に飛び込みました。「体が思ったより早く浮いた」「顔が水面に出るので海水を飲まずに済んだ」など、隊員たちの反応は上々。シーカヤックやシュノーケリング体験の時にも手順を思い出しながら、きちんと装着しました。

ライフセーバーから、海岸から沖合に向かって強く流れる「離岸流」があることを教えてもらいました。五輪に出る水泳選手よりも速い流れと聞き、驚きの声が上がりました。海に出る際は「大人と一緒に」「サンダルが流されても追いかけない」「ライフジャケットを着用する」の3つを必ず守ることも誓いました。